

インターネット利用環境実態調査 2022

生徒指導部 堀田 景子

本校では、2019 年から BYOD (Bring Your Own Device) 始め、本年度からは 1 学年の生徒が一人一台端末として個人用 iPad を購入し、様々な学習活動に利用している。現在の 2、3 年生は BYOD を学習活動に利用しており、個人用 iPad が一人一台端末として完全に全学年に整備されるまでの移行期でもある。ICT 教育の環境整備が進む中で、新型コロナウイルスによる休校期間を境目として、様々な情報機器が学習やその他の活動に有効に活用されるようになり、生徒の情報機器の利用実態やその活用状況、インターネットの利用環境を調査し、より一層指導や助言等に生かす必要性を感じている。よって、本年度も内閣府が実施している「青少年のインターネット利用環境実態調査」を基に調査を行った。

インターネットを利用している機器は、自分専用のスマートフォンの利用が 98.6%で最も多く、続いてインターネット接続テレビが 48.6%、ゲーム機が 44.0%であった。スマートフォンの利用内容は、動画を見るが 93.3%で最も多く、音楽を聴くが 90.2%、投稿やメッセージを交換するが 90.0%であった。スマートフォンの利用時間は、2 時間から 3 時間が 33.5%で最も多く、3 時間から 4 時間が 22.3%、1 時間から 2 時間が 21.9%であった。また、5 時間以上は 10.2%であった。2 時間から 3 時間が最も多い傾向は昨年度と同様であるが、3 時間から 4 時間までを含めると、昨年度は全体の 47.6%であったのに対し本年度は 55.8%となり、5 時間以上利用する生徒も 1 割を超えている。全体としてスマートフォンの利用が長時間になっている傾向を示している。

また、本年度は個人用 iPad の利用についてと BYOD についての項目を調査項目として追加した。一人一台端末として個人用 iPad を校内で所持しているのは 1 年生のみであるが、授業での利用について良い点と感じている点は、調べたいものがすぐに検索できるが 94.1%、記録や保存がすぐにできるが 58.9%、家庭学習に利用できるが 47.9%、情報を共有しやすいが 46.2%であった。一方、2、3 年生が BYOD を経験した感想としては、調べたいものがすぐに検索できるが 70.7%、自分の端末のため使いやすいが 51.4%、記録や保存がすぐにできるが 44.4%、課題の提出が簡単になったが 31.5%であった。個人用 iPad 利用の学習に関する良い点として挙げている割合が、BYOD の同項目よりも良いと評価している生徒の割合が多く、一人一台端末として個人用 iPad が今後も学習の効率や成果を上げていく可能性が高いといえるのではないだろうか。一方で、BYOD を実施している 2、3 年生では自分の端末のため使いやすいと感じている生徒も半数を超えている。今後、個人用 iPad を学習活動の端末としてどこまで活用を広げるかによっては、CYOD (Choose Your Own Device) など新しいスタイルでの一人一台端末を利用した学習活動も考えられるだろう。

<キーワード> インターネット利用環境実態調査 情報機器 スマートフォン BYOD
一人一台端末 iPad Z 世代

1 はじめに

本校では、2019年からBYOD（Bring Your Own Device）始め、本年度からは1学年の生徒が一人一台端末として個人用iPadを購入し、様々な学習活動に利用している。現在の2、3年生はBYODを学習活動に利用しており、個人用iPadが一人一台端末として完全に全学年に整備されるまでの移行期でもある。また、2018年度から継続して情報機器の利用実態についての調査を行ってきた。ICT教育の環境整備が進む中で、新型コロナウイルスによる休校期間を境目として、様々な情報機器が学習やその他の活動に有効に活用されるようになった。そして、今後も情報機器を利用した学習活動や日々の生活での活用が広がると考えられ、生徒の情報機器の利用実態やその活用状況、インターネットの利用環境を調査し、より一層指導や助言等に生かす必要性を感じている。よって、本年度も内閣府が実施している「青少年のインターネット利用環境実態調査」を基に調査を行った。

2 調査概要

（1）調査対象

対象者は第1学年120名、第2学年115名、第3学年196名の計431名である。

（2）調査方法

時期は12月末とし、回答には約1週間の期限をもうけ、Classiのプラットフォーム上で行った。

（3）調査項目

内閣府が実施している「青少年のインターネット利用環境実態調査」¹⁾を元に質問項目を作成し、本校独自の質問項目も追加して実施した。本校独自の質問は、Classiの利用について、1学年の生徒には学校指定の個人用iPad（以下個人用iPad）の利用について、2、3学年の生徒にはBYODの利用について、個別の質問項目を設けた。

回答は選択式および記述式とし、Classiのプラットフォーム上で行った。また、選択式の回答については複数選択形式を原則とし、一部単一選択方式とした。

3 インターネット利用環境実態調査の主な結果

（1）回答率

1年生119名、2年生115名、第3学年196名の計430名が回答した。回答率は99.8%であった。男女比は男子38.1%、女子61.2%であった。

（2）インターネットの接続および利用率

インターネットは99.3%の生徒が利用している。インターネットを利用している機器は、自分専用のスマートフォンの利用が98.6%で最も多く、続いてインターネット接続テレビが48.6%、ゲーム機が44.0%であった。

（3）インターネット接続機器の利用内容

スマートフォンの利用内容は、動画を見るが93.3%で最も多く、音楽を聴くが90.2%、投稿やメッセージを交換するが90.0%であった。続いて、検索をするが87.7%、勉強をするが70.2%であった。パソコンを利用している生徒は、自分専用および家族と共有を合わせて47.7%となり、約半数が利用している。パソコンを利用している生徒の利用内容は、検索をするが68.3%、動画を見るが49.3%、撮影や制作、記録をするが46.8%であった。タブレットは同様に41.7%の所有率であった。その利用内容は、動画を見るが68.6%、検索をするが61.0%、勉強をするが49.7%であった。ただし、他のインターネット接続機器の利用内容と比べ、1年生と2、3年生では異なった傾向を示し、学年別でみ

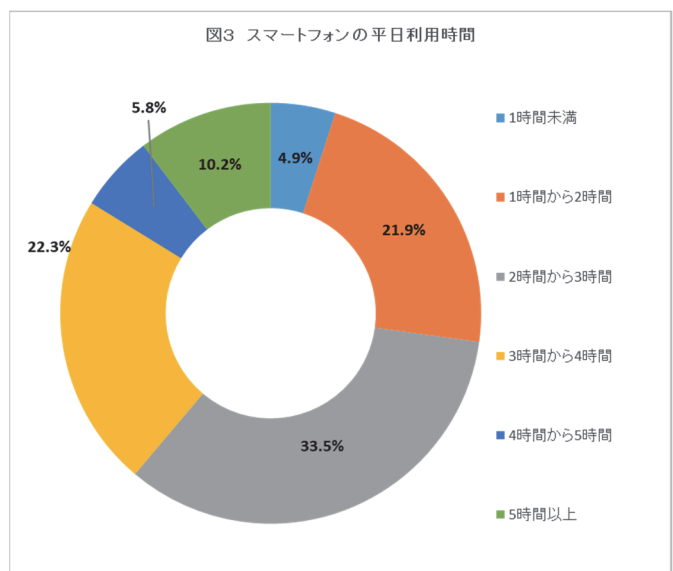
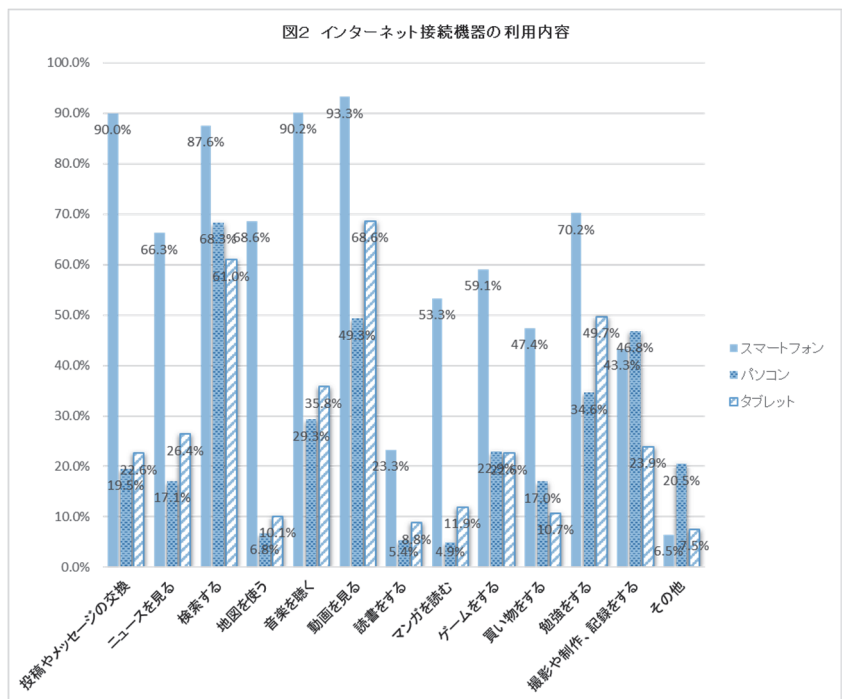
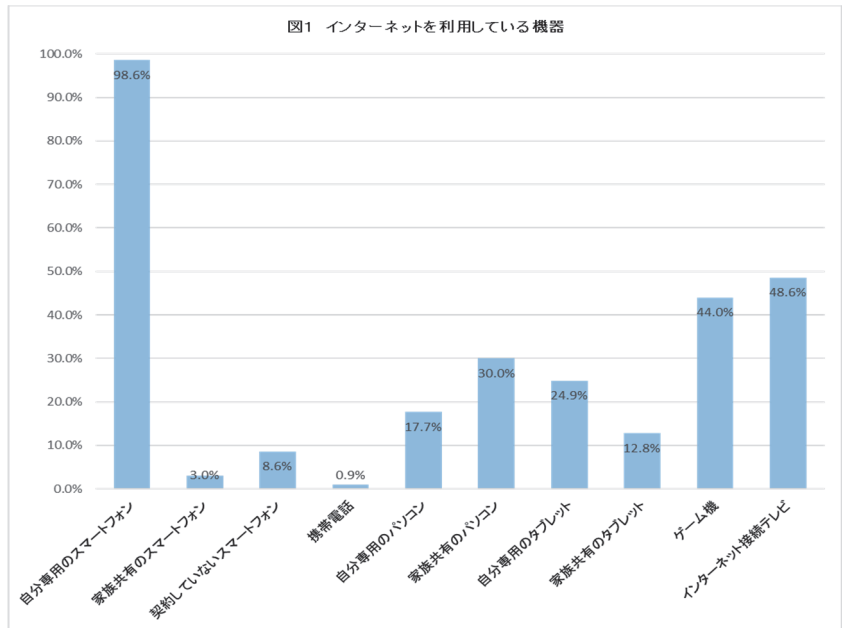
ると、1年生は検索をするが67.1%、勉強をするが65.9%、動画を見るが60.0%であった。一方で、2、3年生は動画を見るが78.4%、検索をするが54.1%、勉強をするが31.1%であった。これらの結果は各情報機器ともに利用していると回答したものに対する割合である。

(4) 各機器の平日の平均利用時間

スマートフォンの利用時間は、2時間から3時間が33.5%で最も多く、3時間から4時間が22.3%、1時間から2時間が21.9%であった。5時間以上は10.2%であった。パソコンは、1時間未満が72.8%で最も多く、次いで1時間から2時間が14.1%であった。タブレットも同様に、1時間未満が61.0%で最も多く、次いで1時間から2時間が29.6%であった。インターネット接続テレビについては、1時間未満が46.3%、1時間から2時間が36.8%であった。

(5) 情報モラルやセキュリティの意識について

悪口や嫌がらせのメッセージやメールを送られたり書き込みをされたことがあるのは2.6%、同様に書き込みをしたことがあるのは1.9%であった。また、他人が見ることが出来るSNS等で自分の情報(名前や写真、メールアドレス、ID)などを書き込んだことがあるのは8.1%、一方、他人の情報を書き込んだことがあるのは3.3%であった。ゲームやアプリへの課金経験は23.0%であった。自分が知らない人や、知らないお店などからのメッセージやメールがきたことがあるのは32.1%、迷惑メールやメッセージが送られてきた経験は



43.3%であった。インターネットで知り合った人とメッセージやメールのやり取りをしたことがある（SNSも含む）のは28.4%であった。

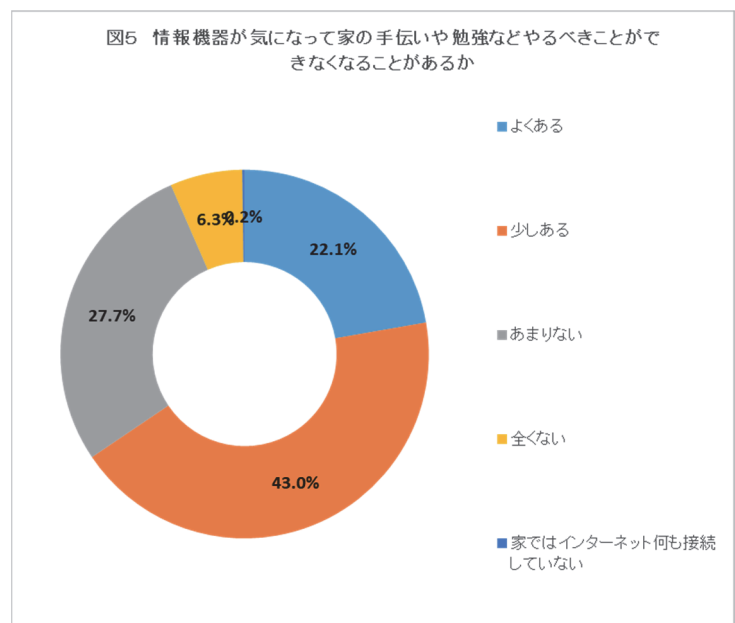
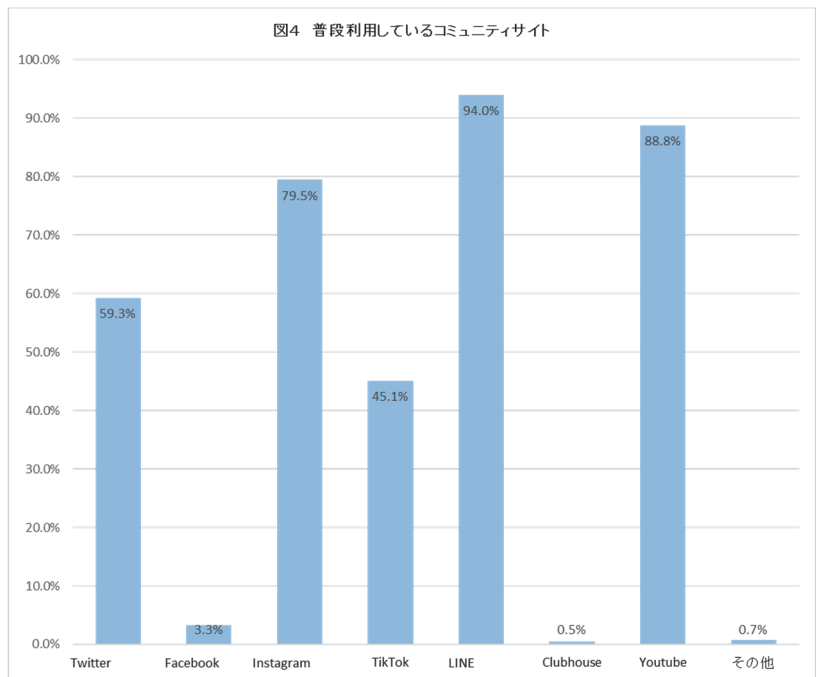
普段利用しているコミュニケーションサイト（SNS）は、LINEが94.0%で最も多く、次いでYoutubeが88.8%、Instagramが79.5%であった。インターネットで知り合った人とのメッセージのやり取り（SNSも含む）の経験は28.4%であり、インターネットで知り合った人と直接会ったことがある経験は同性が7.0%、異性が3.5%であった。インターネットで知り合った人との人間関係で悩んだことがある経験は3.5%であった。

インターネットの使い方について、家庭でのルールが決められているかについては、困ったときはすぐに保護者に相談するが35.1%、家庭でルールを決めていないが34.7%、続いてゲームやアプリの利用方法や利用料金、課金の上限が27.9%であった。

スマートフォンなどを通じて友だちとのコミュニケーションを面倒だと感じる可能性があるかについては、よくあるが15.8%、少しあるが32.6%、あまりないが36.7%、全くないが13.3%であった。インターネット利用機器が気になって家の手伝いや勉強など、やるべきことができなくなる可能性があるかについては、よくあるが22.1%、少しあるが43.0%、あまりないが27.7%、全くないが6.3%であった。

（6）インターネットの危険性の認知および学習の機会

インターネットの危険性についての学習の機会は、学校（小・中・高）の講演会や配布資料が84.2%、学校の授業が70.9%で高く、続いてインターネットが28.8%、保護者が26.5%であった。学習の内容は、インターネット上のコミュニケーションに関する問題（他人への悪意ある書き込み、言葉による攻撃など）が79.5%、プライバシー保護に関する問題が67.7%、児童の性的被害に関する問題（出会い系サイトやSNS等がきっかけなど）が60.7%であった。また、危険性について知りたいと考えているテーマは、セキュリティに関する問題（ウイルスや不正アクセス対策など）が36.7%、プライバシー保護に関する問題（個人情報やパスワードの流出など）が32.8%、電子商取引に関する問題（インターネットオークションや高額な課金など）が24.0%、フィルタリングの必要性や有効性が23.3%



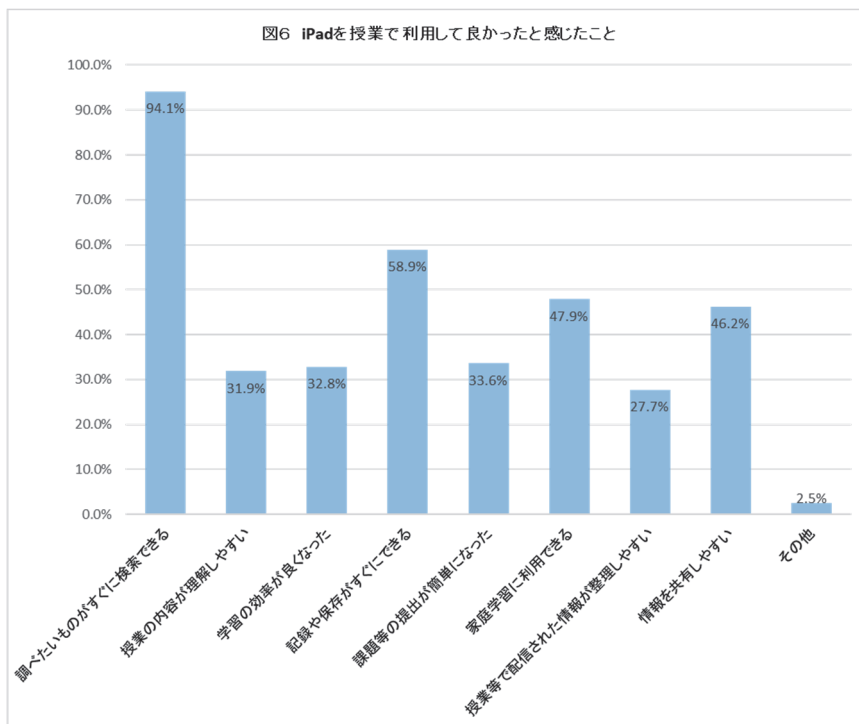
であった。

(7) Classi について

Classi の利用頻度は、ほとんど毎日が 22.1%、週に 5 日程度が 24.7%、週に 2 日程度が 25.6%、ほとんど利用していないが 23.7%であった。Classi の中で利用しているメニューでは、校内グループが 64.0%、アンケートが 60.7%、成績カルテが 63.5%、学習記録が 36.5%、ポートフォリオが 32.3%であった。

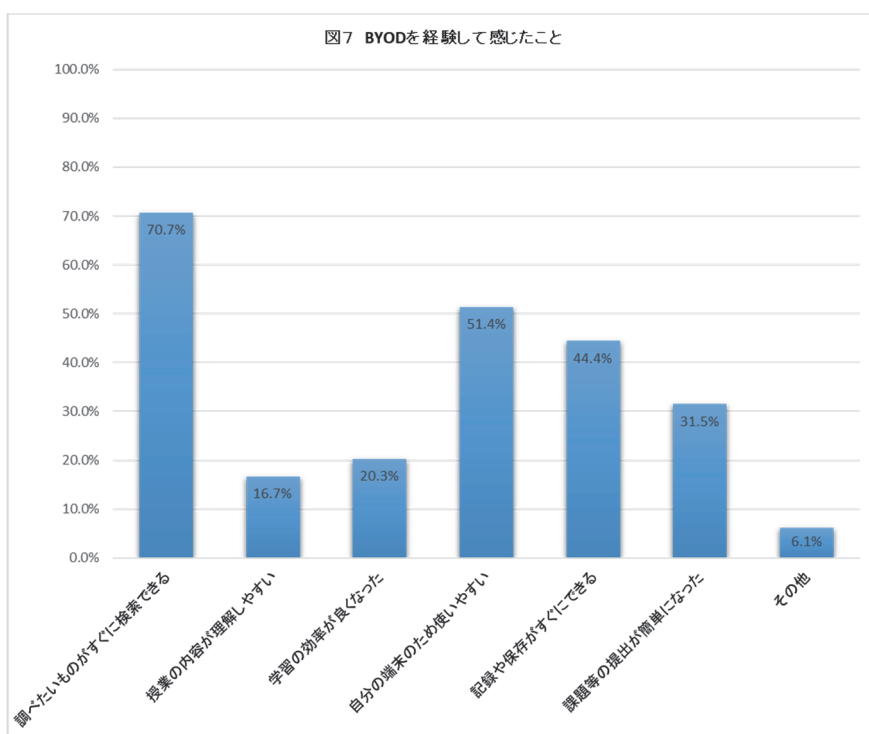
(8) iPad の利用について

一人一台端末として個人用 iPad を校内で所持しているのは、1 年生のみである。授業での利用について良い点と感じているのは、調べたいものがすぐに検索できるが 94.1%、記録や保存がすぐにできるが 58.9%、家庭学習に利用できるが 47.9%、情報を共有しやすいが 46.2%であった。一方、不便だと感じているのは、充電しなければならないが 55.5%、使い方が分からないが 11.8%、自分の持っている端末と操作が違うが 10.1%、周りのスピードについていけないと情報漏洩が心配だがともに 7.6%であった。



(9) BYOD について

BYOD は 2、3 年生で実施している。1 年生は個人用 iPad を授業で利用しているため、個人端末を授業で利用することはない。2、3 年生ともに、入学時から BYOD の経験がある学年であり、そのほとんどの生徒は個人端末として自らのスマートフォンを利用する。BYOD を経験した感想としては、調べたいものがすぐに検索できるが 70.7%、自分の端末のため使いやすいが 51.4%、記録や保存がすぐにできるが 44.4%、課題の提出が簡単になったが 31.5%であった。また、BYOD での学習等に関して、もっとこうなったら便利だと



思うことに関しては、記述形式での回答とした。Wi-Fi の常時接続や個人端末の電源を切らないでおきたいなど通信環境によるものや、英語の授業での電子辞書代わりにしたいやリスニングでの使用、使える場、時間、頻度を増やしたいなど、学習の活用に関する意見が多かった。

4 考察

インターネットの接続は 99.3%で本校の昨年度の調査および内閣府の調査と大きな差は見られなかった²⁾。また、インターネットに接続する機器もスマートフォンが 98.6%であり、内閣府の調査と同様に³⁾ほとんどの生徒がスマートフォンを利用している。接続機器に関しては、インターネット接続テレビ、ゲーム機が昨年度の調査と比べ増加傾向を示した。スマートフォンの利用内容は、動画を見るが 93.3%であり、継続調査を始めてから投稿やメッセージを交換するよりも初めて利用率が最も高くなった。内閣府の調査においても、調査の年代を問わず動画を見るが最も多くなっており、また、音楽を聴く、投稿やメッセージを交換するが 9 割を超える利用であったのも同様であった⁴⁾。スマートフォンの利用傾向に、本校と内閣府の調査との違いが見られたのは、昨年同様ゲームをすることに利用している本校生徒は 59.1%で、内閣府の調査（高校生のみ）の 74.2%⁵⁾と比較すると少ない傾向を示した。パソコンやタブレットの利用内容では、タブレットでは動画を見るが 68.6%、パソコンでは検索をするが 68.3%で最も高く、動画を見るおよび検索をするは、パソコン、タブレットともに他の項目よりも利用率は高く、内閣府の調査と同様の傾向であった⁶⁾。また、タブレットでは勉強をするが 49.7%、音楽を聴くが 35.8%と続き、パソコンでは撮影や制作、記録をするが 46.8%、勉強をするが 34.6%と続く。これらの傾向は内閣府の調査結果と多少異なる割合を示すものもあるが、パソコンとタブレットにおいては、学校から購入・指定されたものと自宅用のものとの区別を今回の調査ではおこなっていないことも理由として考えられる。

次に、最も利用する情報機器であるスマートフォンの利用時間においては、2 時間から 3 時間が最も多い傾向は昨年度と同様であるが、3 時間から 4 時間までを含めると、昨年度は全体の 47.6%であったのに対し本年度は 55.8%となり、5 時間以上利用する生徒も 1 割を超えている。全体としてスマートフォンの利用が昨年度に比べて長時間になっている傾向を示している⁷⁾。さらに、インターネットに接続して勉強をする時間、趣味や娯楽に使う時間、保護者や友人とのコミュニケーションに使う時間ともに、昨年度より長時間化への傾向を示しており、全体的にあらゆる情報機器に触れている時間が長くなっているといえる。1 年生は自分のスマートフォン以外にも個人用 iPad の利用、2、3 年生は入学時から Classi を利用して情報発信や成績確認、ポートフォリオの使用、課題を提出するなどの環境にあり、必然的に情報端末を利用する時間が増えたことも影響していると考えられる。ただし、内閣府の調査では、スマートフォンの利用時間は 3 時間から 4 時間が最も多く⁸⁾、内閣府の調査と比較すると本校の生徒はスマートフォンの利用時間が少ない傾向にあることは、昨年度と変わらなかった。

現在の高校生は、スマートフォンの所持が低年齢化している世代であり、小学生の時に自分専用のスマートフォンを持ち始める生徒が 4 割を超えていき⁹⁾、中学卒業までに 8 割以上が自分専用のスマートフォンを利用している¹⁰⁾。また、GIGA スクール構想により義務教育期間中にあらゆる情報端末に触れてきた生徒もいる。そのため、多くの生徒がインターネットの危険性やネットいじめの問題などを学校での講演会や授業で説明を受けており、SNS への嫌がらせの書き込みや個人情報の書き込みの経験は年々減少傾向にある。一方で、ゲームやアプリへの課金については、昨年度は 17.9%であったのに対し、本年度は 23.0%となっており増加傾向にある。また、知らない人やお店からのメッセージは、昨年度は 27.2%に対し本年度は 32.1%、迷惑メールやメッセージは、昨年度 40.0%に対し本年度 43.3%となっ

ている。さらに、インターネットで知り合った人とのメッセージやメールのやりとりに関しても、昨年度は 26.4%に対して本年度は 28.4%、インターネットで知り合った人と同性異性問わず直接会ったことがある生徒も、昨年度は 9.4%に対し本年度は 10.5%となり¹¹⁾ 1 割以上の生徒がインターネットのみで知り合った人と直接会っている結果となった。これらから、現在の高校生はインターネットの危険性や様々な問題を学んだり説明を受ける機会は低年齢化しその回数も増加しているが、同時に生徒が SNS などを介して他者と繋がる機会も増加し、その方法も多様化しているのではないだろうか。現在の高校生は、デジタルネイティブ世代でもあるが、ソーシャルネイティブ、Z 世代ともいわれる¹²⁾。この Z 世代は SNS 漬けになっている日常が当たり前であると考えている世代であり、Twitter や Instagram では実社会における人間と繋がるというよりは、面識がなくとも興味がある情報を発信する人と繋がり、情報収集としての位置づけで使われることが一般的であるとされている¹³⁾。さらに、Z 世代はコロナ禍の影響をまともに受けている世代である。特に本年度の高校 3 年生は、入学と同時に一斉休校となり、高校に入学をしたものの授業も始まらない、クラスメイトの顔も名前も分からない、外に出ることも憚られるという期間をおよそ 2 か月もの間過ごすことになった。そして、学校が始まっても分散登校や密を避ける、黙食、社会的距離をとるようと言われ、情報を得たり他者と繋がる手段が Twitter や Instagram、YouTube などの SNS に偏っていき、様々な関心がより SNS を介しながらの環境になりやすかったといえる。さらに、実社会においてもこの社会的情勢や環境を利用して SNS で情報を発信したりマーケティングがなされている影響もあるのではないだろうか。このような背景を踏まえて、今後は SNS やインターネットの利用については、単に危険性を伝えるだけではなく指導や情報提供をしていかなければならないだろう。

Classi の利用については、1 年生と 2、3 年生では利用する項目に差が見られた。1 年生は常時個人用の iPad 利用しているため、Classi 以外のツールやクラウド、アプリケーション等も利用していることもその理由であると考えられる。一方、2、3 年生の利用傾向は昨年度と大きな差はないが、全体としては成績カルテ、アンケート、校内グループの利用が 6 割から 7 割を占め、情報の発信や受信、共有のツールとしての機能の面が大きくなってきているのではないかと。今後は全学年が個人用の iPad を利用する場合を想定していく必要があると考えられる。

そして、今回の調査では、1 年生には個人用の iPad について、2、3 年生には BYOD について昨年度追加項目として実施をした。個人用 iPad の校内利用については、本年度の 1 年生から始まったものである。iPad は学校指定品で、個人負担で購入するものである。使用規定については、様々な授業や活動での使用を考慮し、基本的なルールやモラル以外に特に厳しい規制は設けていないが、個人用 iPad の使用前に注意事項やガイダンスを学年全体で丁寧におこなっていることもあり、現在は大きなトラブルもなく利用ができています。個人用 iPad 利用の良い点として挙げられているものは、常時 Wi-Fi に接続し、机上有るという環境であるため、調べたいものがすぐに検索できることをほとんどの生徒が良い点として挙げている。また、学習に関する点では、授業の内容が理解しやすい、学習の効率が良くなった、課題の提出が楽になった、の項目は 2、3 年生の BYOD での質問よりも良いと評価している生徒の割合が多く、個人用 iPad を家庭学習用のツールとして利用している生徒も 2、3 年生に比べて多かった。この傾向からも、一人一台端末として個人用 iPad が今後も学習の効率や成果を上げていく可能性が高いといえるのではないだろうか。一方で、本校が実施している BYOD では常時 Wi-Fi 接続ではないため、電源を入れスマートフォンを起動させる作業や通信制限などの制約もあり、学習の効率を考えると不便さが残る。BYOD での学習に関して、さらに有効かつ効率的に活用させていくには、2、3 年

生の意見に多く見られた Wi-Fi の常時接続が必要になってくるだろう。しかし、そのためには様々な情報機器やアプリケーションがインストールされたものが校内 LAN に接続されるため、セキュリティやモラル、リテラシーの面で課題も残る。また、教員側も生徒が持っているあらゆる情報端末で同じ内容や進捗で授業を進められるかという点も課題となって来るだろう。これらの安全面や管理面、また本校の教員側の端末も iPad であるため、

教える際の効率を考慮した上でも、本年度の 1 年生からは一人一台端末として、全員同じ iPad を購入し利用している。一方で、BYOD を実施している 2、3 年生では自分の端末のため使いやすいと感じている生徒も半数を超えている。ICT リテラシー教育では、講義における ICT 活用と日常の ICT 利用経験が断絶しないような環境づくりが重要であるという指摘や¹⁴⁾、学校指定の統一 iPad では、生徒たちが”文房具“として愛着を持たず、生徒たちが好きな端末を使う BYOD へと切り替えて成果や学びが変わったという例もある¹⁵⁾。今後 iPad を学習活動の端末として、何にどの程度利用していくかなどの活用の広がりや、GIGA スクール構想により今後も入学生は小学生の時からタブレット端末等を学習に利用してきていること、家庭で個人のパソコンやタブレットの所持や活用環境が今以上に整ってきた場合には、CYOD (Choose Your Own Device) など新しいスタイルでの一人一台端末を利用した学習活動も考えられるかもしれない。

5 まとめ

昨年度に引き続き「青少年のインターネット利用環境実態調査」を実施し、昨年度との比較や内閣府の調査結果との比較をし、本年度の本校生徒の傾向を知ることができた。スマートフォンの所持率がほぼ 100%に近い状態は数年間変わっていない。一方で、本校では本年度の 1 年生から個人用の iPad を学習活動に利用している。この個人用 iPad の導入までは BYOD を実施しており、本年度は個人用 iPad の利用についてと BYOD を実施しての結果も一部知ることができた。今後も段階的に個人用 iPad の導入が進んでいくため、現在はその過渡期にある。そのため、個人用 iPad を利用している学年と BYOD を実施している学年では、インターネットの利用時間やその内容に差があるが、今後も継続してこの調査を行っていきたい。

2030 年に向けて、多様性と予測困難な時代が到来するといわれている¹⁶⁾。その時代の変化に対応していくためにも、GIGA スクール構想により義務教育では一人一台端末が整備され、その学びを止めないためにも高校でも一人一台端末を利用した学習活動は必須である。さらに、Society5.0 の実現に向けて、学習指導要領も完全実施されており、ますます ICT を利用した教育の重要性が増し、学び方だけではなく、授業のあり方も多様化が進むことは間違いないだろう。義務教育で始まった GIGA スクール構想はそのスタートであり、今後も ICT 教育は充実かつ変化し続け、高校においてもオンライン授業、オンデマンド授業、ディープ・アクティブ・ラーニング、ホームスクリーニング、など様々な授業の形や学びのスタイルが浸透していくだろう。この急速で急激な変化を遂げていく教育や学習環境の中で、私たち教師は学び続ける姿勢を持ち、情報技術に対応した授業のあり方や指導スタイルを再構築させていかなければならないだろう。



参考文献

- 1) 内閣府 令和4年度 青少年のインターネット利用環境実態調査 青少年調査票 1-10
- 2) 内閣府 令和3年度 青少年のインターネット利用環境実態調査 青少年の調査結果 インターネットの利用状況 2022
- 3) 内閣府 令和3年度 青少年のインターネット利用環境実態調査 青少年調査の結果 インターネットの利用率 2022
- 4) 内閣府 令和3年度 青少年のインターネット利用環境実態調査 青少年調査の結果 インターネットの利用内容 「スマートフォン」 2022
- 5) 内閣府 令和3年度 青少年のインターネット利用環境実態調査 青少年調査の結果 インターネットの利用内容 「自宅用のパソコン・タブレット等」 2022
- 6) 内閣府 令和3年度 青少年のインターネット利用環境実態調査 青少年調査の結果 インターネットの利用内容 2022
- 7) 堀田景子 インターネット利用環境実態調査2021 愛知教育大学附属高等学校研究紀要 第49号 153 2022
- 8) 内閣府 令和3年度 青少年のインターネット利用環境実態調査 青少年調査の結果 インターネットの利用時間 2022
- 9) 内閣府 平成30年度 青少年のインターネット利用環境実態調査 調査速報 参考資料1 青少年のインターネット利用率の経年比較 2019
- 10) 内閣府 令和3年度 青少年のインターネット利用環境実態調査 調査速報 参考資料1 青少年のインターネット利用率の経年比較 2022
- 11) 堀田景子 インターネット利用環境実態調査2021 愛知教育大学附属高等学校研究紀要 第49号 153-154 2022
- 12) 斉藤 徹 日本のZ世代を理解しよう「Z世代の価値観、消費行動から、コロナの影響まで」 JOIN THE DOTS 2021
- 13) 廣瀬 涼 Z世代の情報処理と消費行動(1) -Z世代が歩んできた時代 ニッセイ基礎研究所 2020
- 14) 遠山 緑生 デジタルネイティブ世代に対するICTリテラシー教育科目に関する考察 嘉悦大学研究論集 第54巻2号 71 2012
- 15) 神谷加代 BYODは生徒の当たり前、ストレスから解放して伸びる生徒の力——湘南学園中学校高等学校の取り組み(後編) インプレスビジネスWeb 2020
- 16) 文部科学省 中央教育審議会初等中等教育分科会 資料1 教育課程特別審議会 論点整理 「2030年の社会と子供たちの未来」2015